合気道の稽古者はいかに倫理性を身につけるのか : 意味生成体験という観点から

森山 達矢

Tatsuya Moriyama: How *aikido* practitioners acquire ethics. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 58: 225-241, June, 2013

Abstract : This paper examines the relationship between ethics and the Japanese martial arts (*budo*). The issue of this relationship has been studied mainly from the standpoint of history, and has not been much researched from the standpoint of practitioners. Therefore, in this paper, I describe how practitioners acquire the ethics of *budo* by approach the topic through the concept of “becoming,” as maintained by Sakuta, Yano and Kameyama, with the intention of clarifying the inner processes adopted by practitioners. For this purpose, I observed participants at an *aikido dojo*. Generally, participant observation means describing the experiences of field work objectively. In this paper, however, I describe the aikido practitioners’ inner experiences, and from that I try to clarify the practical aspect of the relationship between ethics and *budo*.

The findings of my study were as follows. In the practice of *aikido*, the practitioners are instructed to harmonize with each other and are taught that this feeling of harmonization is the “Aikido spirit”. Not only by developing this feeling, but also an awareness that the mind and body don’t match each other, and control of mind and body cannot be achieved together, aikido practitioners gain a new view of the world, and reflect on everyday life and communication with others through the feeling gained in the *dojo*. *Aikido* practitioners acquire ethics through constant reflection on mind and body. Such reflection is indispensable in order for practitioners to embody morality. I think it is possible to consider fundamentally the roles of modern Japanese martial arts by clarifying these processes.

Key words : *budo*, ethics, practice, aikido, becoming

キーワード : 武道, 倫理, 稽古, 合気道, 意味生成

1. はじめに

武道は、心技体それぞれを鍛錬するものであり、そしてそれが持つ精神性の高さゆえにスポーツとは異なるものとして考えられている。たしかに、一般的には武道の精神性とスポーツマン・シップとは重なるところはあるにしても、根底のところでは異なっているものだと思われる。例えば、武道を修行しているものが罪を犯したとき、多くの人は「武道の修行で何を学んだのか」と呆れるだろう。逆にあるスポーツ選手が犯罪行為をおこなったとき、「スポーツ競技を通して何

を学んでいたのか」と思うことはそれほど多くはないのではなかろうか。このようなことを考えてみても、われわれが武道に求めているものがスポーツとは多少異なることや、武道修行者に対して精神的な高潔さを期待しているということが理解されるだろう。文部科学省が武道を必修化したのも、日本の伝統を学ばせるということ以上に、武道が持つ人格を形成する可能性を重視したからであろう。

しかし田中（2000）は、近年の武道のあり方に警鐘を鳴らす。「武道は『人間形成の道』と位置づけようとする姿勢はみられるものの、現実には技術的側面のみが優先され、道徳的側面が欠落

無所属

〒847-0043 佐賀県唐津市新興町2893-1-303

連絡先 森山達矢

an independent

2893-1-303 Shinkomachi Karatu-shi Saga 847-0043

Corresponding author nt.tnb1103@gmail.com

しつつあることは否めない。武道がスポーツか否かの議論も、最終的にはこの技術的側面と道徳的側面のかかわりの問題に帰結するであろう」（田中，2000，p. 61）。武道から精神性・道徳性を無くしてしまうと単なるスポーツと化すのであり，逆にいえば武道を武道たらしめるのもそれが人格の陶冶と密接に結びついているからなのである^{注1)}。そして，本稿が焦点を当てるのはまさにこの点である。つまり，本稿が問題とするのは，武道と精神性，人格形成，道徳などとの関係についてである。武道に本質的に内在するとされる精神性，人格形成，道徳といった事柄は，結局のところ「武道を極めようとするものが，修行を通してどのような生き方を選択するのか」ということに，すなわち「どのように生きるのか」ということに収斂する。本稿の問題意識を改めて言い直すならば，武道と倫理との関係とはいかなるものなのかということとなる。

2. 問題の設定

2.1 先行研究

まず，武道と倫理の関係についての先行研究を検討してみよう。武道と倫理の関係に関する研究は，これまで武道の修行という観点でおこなわれてきている。そのなかでは，古武道諸流派の武芸伝書を読み解き，それらを整理，分析することが多い（前林，1988，2007；竹田，1996；魚住，2005；ボディフォード，2005）。つまり，歴史的な観点から武道と倫理との関係は分析されてきた。また，武道と倫理というテーマは，その教育的な役割についても議論されている（前林，1989；友添・和田，1993；寒川，2005；大矢，2005；本村，2005；マーク，2005）。

これらの研究がおこなわれていることは歴史的文献の考証であり，またそれらが対象としていることは，武道に関する表面的な言説である。つまり，これらの研究対象は，理念・思想であり，言説である。いってしまえば，これまでの研究は，武道と倫理の関係を抽象的にしか論じていない。たしかに倫理というのは理念的に構成されるもの

であるが，しかしそれは「生きられる（lived）」ものでもある。

湯浅は，東洋的な修行について，次のように述べている。

東洋哲学の伝統的心身観では，修行を通じて心身の関係が日常ふつうの状態からどう変化するか，そしてそのときどういう心理状態が体験されるかという経験に即して，ふつうではわからない両者の奥深い未知な関係を認識していくのです。ですからそれは単に考え方の問題ではないのです。ここでは実践と理論はもともと一体ですから，身体の訓練は同時に心の訓練であり，それは心の向上，つまり人格の成長や人間性の変革といった，人生の生き方の問題につながっていくのです（湯浅，1986，pp. 100-101）

たしかに，例えば学校の部活において，厳しい上下関係によって礼儀を身に付けることもあるだろう。また，試合で勝つために，苦役にも似た激しい練習をおこなうことで忍耐力を身に付けたり，努力することの大切さを学んだりしたりすることをつうじて，社会で生きるためのスキル（社会性，他人を敬う心など）を身に付けることもあるだろう。しかし，そうしたことは，学校の部活という組織に内在することと関連していることであり，武道の本質的なあり方とは関係ないことである。また，たしかに武道の修行においては試合で勝とうと技を磨くなかで人間形成がなされるということがいわれるが，しかしそれが具体的に論じられるということはあまりない。いうまでもなく，人が武道を稽古すれば自動的に倫理的な振る舞いができるようになるわけではない。倫理的な振る舞いができるようになるには，先生や同門の人々と交流し稽古を積み重ねること，さらに内面的な反省を繰り返すこと，およびこれらの複雑な実践が必要である。このような実際の側面から武道と倫理を捉えた研究はおこなわれていない。つまり，どのような過程で倫理性が身に付くのかという点については，あまり議論されていないのである。

これまでみたように，これまでの研究は，武道と人格の形成，倫理の形成ということについて，

文献学的な研究、思想史・精神史的な研究しかおこなっていない。肝心の「武道稽古者と倫理」そのものの関係を対象としている研究はない。ひとことでいえば、武道と倫理の関係を、稽古者に内在した視点で記述し分析したものは見られないということである。筆者が問題としたいのは、まさにこの点であり、湯浅の言葉でいうなら、「修行を通じて心身の関係が日常ふつうの状態からどう変化するか」ということである。

以上の問題について、本稿では、どのような意味において身体は訓練が心の訓練となっているのかということや、武道の技やその稽古に内在するものが、倫理性の獲得とどのように関わるのか、その実際の局面を記述する。要するに、本稿は、稽古者が倫理性を身に付けていく過程を記述するものである。

2.2 分析枠組み

本稿は、上記の点にかんして「生成」という立場からアプローチしたい。本稿の「生成」という考えは、基本的に作田（1993）や彼に影響を受けている矢野（1995, 2000）、亀山（2012）のそれに従う。彼らに共通する主張をまとめると、スポーツ体験や宗教体験にみられる、自分と対象との境界がなくなるような「溶解体験」によって、人は新たな自己を獲得するのであり、そうした強烈な体験が「生成」だということである。ここで、この生成という概念について、認識論的側面と方法論的側面から説明しておきたい。

まず認識論的側面について説明する。「生成」という概念の背後には、身体は「自己経験と世界経験の基礎」とあるという認識がある。溶解体験という身体的経験によって自己の経験のあり方は、一遍に変化してしまう。そうした劇的な体験を「生成」という概念は捉えようとしている。矢野はこうした経験を「意味生成」と呼ぶ^{注2)}。本稿も矢野に従い、身体的な経験が新たな自己の経験を生み出すことを意味生成と位置づける。本稿が意味生成という概念に着目する理由は、この言葉が自己の変容に焦点を当てるものだからである。矢野にとって自己の変容というのは、単なる

発達上の成長的な変化などではなく、安住している疑問視されない当たり前の世界（労働の世界、有用性の世界）から劇的に跳躍し、別の世界的な次元を獲得するということである。こうしたことを矢野は、「至福と光の充溢のなかで新たな自己の生まれ変わり」と新たな世界の出現の体験」といい、それは、「世界の区切り方が、全面的・根本的に変容」することであり、「世界と自己との関係全体」が組み変わるということだという（矢野, 2000, pp. 85-86）。繰り返すが、本稿では、このような世界と自己との関係の根源的な変容のことを意味生成と捉える。それゆえ、本稿で自己の変容といった場合、世界観の変化ということの意味するのであり、価値観の動揺のない、既成の世界観内での単なる知識や技術の獲得というような自我の変容を意味するものではない。武道において人格の陶冶という場合、いうまでもなく、前者のことを指す。武道がそのような「意味生成」をもたらすからこそ、武道の教育的意義が語られてきたのだと、筆者は考える。

次に方法論的側面について説明する。亀山によれば、ある現象を「観察者が体験の外部から観察してとらえる」あり方を「定着論」といい、それとは逆にある現象を「身体運動や働きを体験の内部からとらえようとする」あり方、つまり「対象に入り込んで内部からそれを把握する」あり方を「生成論」という（亀山, 2012, p. 25）。前節で設定した問題について、本稿では方法論的にもこの「生成論」を用いる。このことは、本稿の目的に鑑みて妥当なことであろう。なお、方法論については、次節でも説明する。

以上述べてきたように、本稿では、武道と倫理との関係を、「自己の変容＝意味生成」という観点から、「生成論」という方法を用いて、これまでとは異なったあり方で分析しようとするものである。ここで、問題を改めて設定しなおせば、「意味生成」という観点から、武道の稽古者がいかに新たな世界観を獲得し倫理性を獲得するのか、その具体的な側面を明らかにする、ということになる。

2.3 方法

筆者は、合気道道場において長期のフィールド・ワークをおこなった（1999年2月より2010年3月）。方法は、参与観察法である。稽古者とともに稽古をおこない、そこであったことをフィールド・ノートに書き留めた^{注3)}。この参与観察法のあり方について、いくつか説明を加えておきたい。

一般的に参与観察は、「目で見たことを正しく記述する」という考えに基づいている。それはいわば視覚重視の方法である。参与観察においては、被調査者と適度な距離を取りつつ、客観的な立場に徹して記述するというのがオーソドックスな振る舞いである。しかし筆者は、これとは異なった参与観察の方法を用いた。参考にしたのは、「カポエラ」のフィールド・ワークをおこなった人類学者のDowney（2005）の方法論である。彼も調査をおこなうとき、カポエラを実際に修得している。そうした調査で彼は、カポエラの技を社会的な言説や象徴によって説明しようとするような、人類学にありがちなことはせずに、「人がどのように学ぶのか」ということ、「カポエラが人にどのような影響をあたえるのか」ということ、そして「カポエラを身に付けた後、当事者から世界はどのように見えるのか」ということを明らかにしようとしたのである。彼の方法論は、カポエラを外から観察するのではなく、内側（身体）から外（カポエラ）を視るというものである。このようにDowneyは、観察する主体の身体全体に根付いた観察のあり方を強調している^{注4)}。

彼のこのような方法論は、先に言及した亀山の「生成論」と合致するものであり、さらに「意味生成」、すなわち世界観の変容ということを経験的に記述するという本稿の問題意識とマッチしている。本稿では、Downeyの方法論にならい、合気道稽古者の視点から、合気道の稽古のあり方を記述する。

3. フィールド・ワークの概要

3.1 合気道とは

合気道は、開祖植芝盛平（1883-1969）が、柔術・剣術・槍術などいくつかの武術を修行し、それらを総合して創作した武道である。いうなれば、合気道とは「創作武道」であり、「近代武道」である。植芝の子息である植芝吉祥丸は、合気道について次のような紹介文を書いている。「合気道は日本古来の伝統をふまえた武道」であり、「古武術の奥義を一段と飛躍させた武道の集大成であると同時に、現代社会に即応しながら新しい工夫が加えられた現代武道」である。合気道は、「勝敗を競うスポーツの道は選ばずに、あくまでも武道精神を尊重し、しかも現代武道として発展してきた。合気道の最大の特徴は、日本の伝統を伝えながら新しいいぶきを吹きこんだ純粋な現代武道であるという点にある」（植芝，2000，p. 10）。吉祥丸は、合気道の特質として、「修養法」「護身術」「心の健康法」「体の健康法」「生涯教育」などをあげている（植芝，2000，pp. 10-15）。

3.2 フィールドの対象とした道場

まず、筆者がフィールド・ワークをおこなった道場について説明しよう。筆者が調査に入った道場は、M流合気道の一道場である。M流合気道は、開祖の弟子であったS師範^{注5)}が開いたものである。彼は、大正末期に大本教を深く信仰する家族に生まれ、青年時代に植芝盛平の内弟子となる。戦後まもなくK市に自身の道場を開き、その後植芝から九段を認可され、師範長を命ぜられる。S師範は開祖の死後独立し、独自に合気道の探求をおこなった。

S師範は、「合気道は、武道であって宗教である」という植芝の言葉を引きながら、彼の精神を目標に、合気道の技の鍛錬に努めなければならないと稽古者にいっている。師範のそうしたスタンスもあり、M流合気道は他の流派と比べると、より「宗教色」が強いといわれる。S師範は演武会などにおいて、入門当初に植芝からいわれた

「この武道は神様から頂いたもんや」「この武道は三カ月やったら無敵になる」という言葉の意味をずっと探求してきたと稽古者に語っている。

また、S 師範は、稽古者に向けて、次のような自らの経験を話す。彼はかつて、合気道を広めていこうとするなかで、他の武道をやっている人たちから、自らの技は通用しないということを痛いほど突きつけられた。彼は合気道をやめようと考えたが、開祖の「精神」をもう一度顧みることで、自分の技が効くように稽古を続けた。「ただひたすら、相手と一体になる心というのはどういうことなのかを考え、稽古をおこなった」という。そのような試行錯誤のなかで、彼は、開祖のいうことと技のあり方は同じであるということを確認したという。S 師範は、合気道の技のあり方と開祖の精神とは同一のものであり、開祖がいう「和合の技」が合気道の技であり、相手を痛めつけるような技、相手をやっつけてしまうような技は合気道の技ではないといっている。彼は、合気道の技の型のみを追求してもほとんど意味はなく、開祖の精神を体で現すことが重要なのだということを、繰り返している。

筆者が調査をおこなった道場は、F 市内にある。週 4 回各 1 時間（19 時～20 時）の稽古がおこなわれている。道場長は、50 代の男性で、大学時代に合気道部に入部し、卒業後も合気道を続け、現在は道場長として専門に合気道を教えており、他に大学合気道部の監督の任も担っている。道場長は、S 師範の考える合気道を受け継ぎ、それを自分の理解の範囲内で道場生に伝えようとしている。

かつて F 道場は、道場長の大学の先輩が管理していたが、都合により道場長が道場を引き継ぐことになった。10 年ほど前まで、F 道場は、地域の公民館を借りて稽古をおこなっていた。現在は道場長所有の建物のなかに、30 畳ほどの広さの道場があり、そこで稽古をおこなっている。多くの支部道場は、公的な施設を時間単位で借りて稽古をおこなっているが、F 道場は個人所有の道場であるため、正規の稽古時間だけではなく時間外の稽古も活発におこなわれている。

稽古者は、稽古時間前に道場に入り、ストレッチや軽い体操をするなどして体をほぐしたりする。稽古者は、稽古がおこなわれる日に最初に道場へ入るとき入り口にて、一揖、一拝の礼拝をおこなう。また稽古を終えて退出するときも同じ礼拝をおこなう。

稽古は、礼拝から始まる。開始時間になると、道場長が、道場内の壁にある神棚の前へ進み、稽古生たちと向き合い、稽古を始めることを告げる。そして、道場長は神棚のほうへ体の向きを変える。道場長と稽古生は、神棚に対し姿勢を正して礼拝をおこなう。この礼拝は、われわれを生かしている自然への感謝と、自然の理に従って人としての最高の力を発揮できるようにという祈りを意味している。礼拝は、一揖、二拝、二拍手、一拝、一揖という順番でおこなう。次に開祖の写真に向かい一揖、一拝、一揖の順で礼拝をおこなう。次に『合気道の精神』と、植芝が詠んだ「道歌」を全員で唱える。稽古者が合唱する『合気道の精神』とは、次の文言である。

合気とは愛なり。天地の心を以て我が心とし、万有愛護の大精神を以て自己の使命を完遂することこそ武の道であらねばならぬ。合気とは自己に打ち克ち敵をして戦う心無からしむ。否、敵そのものを無くする絶対的自己完成の道なり。而して武技は天の理法を体に移し靈肉一体の至上境に至る業であり、道程である。また、道歌は、次の通り。

気の御わさ魂^{たま}の志づめや襖^{あめつち}技導きたまえ天地の神
誠をば更に誠に練り上げて顕幽一如の真諦を知れ
合気にてよろず力を働かし美^{うるわ}しき世と安く和すべし

合唱される『合気道の精神』とは、S 師範が開祖から直接聞いた言葉のなかから、師範自身が合気道の本質だと思われるものをつなぎ合わせて作ったものである。S 師範は、『合気道の精神』は、自身の技が、開祖の精神と合致しているという確信を得てはじめて公にしたものであるということをし、何度も語っている。

合唱の後、準備運動をおこなう。準備運動のはじめに、「とり船」と呼ばれる、船の櫓を漕ぐ動きを模した体操をおこなう。この動きは、体をほぐすための準備体操の役割を持っているというわけではなく、俗の汚れを落とし、身を清めるという宗教的意味があると説明されている。また準備運動のなかには、精神を落ち着かせるための腹式呼吸などもおこなわれている。

準備運動を終えたのち、技の稽古に入る。稽古は型稽古である。はじめに道場長が技の手本を見せ、要点を説明し、その後に稽古生同士が互いに技をかけあう。

終了時間になると二人一組で整理体操をおこない、最後に全員で礼拝し稽古は終わる。稽古の後には、そのまま残って稽古をする人もいる。時間外の稽古では、通常の稽古とは異なり、稽古生各自がそれぞれ課題にしていることに取り組み、互いに意見を出し合いながら、稽古を続ける。これは上級者同士にみられることである。下級者は、道場長や上級者に稽古で上手くできなかった技やどこが悪かったのかを質問するなどして、自らの稽古を続ける。

道場長は、稽古時間内においては積極的に稽古者に対して助言をおこなうが、時間外の稽古においては黙って稽古者の動きを観察しながら、頃合いを見計らって、より細かな助言をおこなう。また道場長は、S師範の動きについて道場長の気が付いたこと、S師範の言葉や助言、実際に師範の技を受けた感じを織り込みながら指導をおこなっている。

また普段の稽古とは別に、特別な稽古として毎月一回「有段者研修会」がある。これは、K市にある本部道場で、S師範自らが直接稽古を付けるものである。有段者研修会には、各地から毎回100名ほどの道場生が集まる^{注6)}。

武道の上達を量るものとして考えられる昇級・昇段について説明すると、他の流派には昇級・昇段のための試験があるが、M流にはない。稽古日数と道場長の判断によって、昇級する。それゆえ、級・段という位が、この技ができるから何段というように、稽古者の能力を客観的に示すもの

とはなっていない。そのため、F道場には、級・段にこだわりの持つという雰囲気がない。F道場においては稽古者のモチベーションは、昇級・昇段によって維持されているのではなく、合気道の技の魅力、不思議な技を身に付けたいということが大きな割合を占めているように思われる。昇級・昇段となった場合は、道場で「昇級・昇段式」がおこなわれ、証書が道場長から昇級・昇段者に手渡される。この式の後には、「直会」が開かれ、食事をしながら稽古生同士の交流がおこなわれる。そこでは、普段の稽古では話題にならないようなことが、話されたりする。話題の多くは、合気道に関することが多く、自分自身が合気道をどのように考えているのかを述べ合ったりする。道場長は、こうした交流をととても大事にしているということを稽古生たちに語っている。

3.3 「呼吸力」という力

M流の稽古では、「呼吸力」という力を重視する。M流では、この呼吸力を身に付けることが稽古の大命題となっている。S師範は、呼吸力を次のように説明する。呼吸の調和が取れているときに安定しているときであり、その安定した状態から力がでたとき、真の強さがでる。しかし、相手を意識したとき安定を失う。すべてを相手に「まかせきる気持ち」にならないと呼吸力はでない。呼吸力は、体力的な力ではなく、心の世界が相手と一体になる気持ち、万有と一つになる気持ちにならない限り発揮できないものである。相手を体力で倒そう、やっつけてやろうと思う心からは、呼吸力はでない。相手と一体になろうとする素直な心があってはじめて力が抜ける。力が抜けないと、相手の中に自分の力は流れない。相手のなかに流れる力が呼吸力なのである。そしてS師範は常に、「呼吸力」こそ『合気道の精神』、開祖の心を体現したものだということを強調している。

S師範は、稽古者に自らの手を取らせ「呼吸力」を、身体を通して実感させる。筆者は、S師範の技を受けたことがある。師範はどこにでもいそうな小柄な老人に見える。しかし、老躯でありなが

ら、手を取りにきた者を次々と簡単に投げる。筆者がS師範の手を握った感覚は、次の通りである。普通誰かの手首を握ると、握られた相手は、握られたことに対して身をこわばらせるなどの身体的な反応を示す。その反応によって、相手の身体の内存在を感じる事ができるのだが、S師範の手首を握ってもそのような反応は返ってこない。そのため、手首を握っている感じだけが残り、師範の身体の内配を感じる事ができない。手首以外なにも存在していないという感覚なのである。そして気が付いたら、抵抗することもできず、投げられている。投げられたとき、不思議と痛みを感じない。気が付いたら受身をとっていたという感じである。

このような筆者の体験を踏まえてこれから、この呼吸力を稽古者がいかに身に付けていくのかということを記述する。いうまでもなく、稽古者の全員が呼吸力を身に付けているわけではない。身に付けようと鍛錬しているのである。誤解がないようにいっておけば、ここから記述することは、あくまでも技を身に付けようとする過程であり、心身の鍛錬のプロセスである。この点について、先に言及した『合気道の精神』や植芝やS師範の言葉である「敵を無くす」や「一体になる」という言葉を議論の軸に据えて、記述してみたい。

4. 意味生成＝倫理性獲得の過程

4.1 稽古のあり方

一般的に武道の稽古では、型が重視され、まず型を覚えることが重視される。M流においても型の大切さは説かれる。しかし、実際の稽古のなかでは、見た目の型よりも、身体内部の感覚のほうが重視されている。稽古において技は、技の見た目の綺麗さよりも、稽古相手の重心を奪うことができたかどうかによって評価される。ゆえに、いくら技が型通りで綺麗でも相手がきちんと崩れていなければ評価されず、逆に多少型が壊れていても相手の重心を奪っていれば評価される。

稽古において非常に重視されていることは、「力を抜く」「力を入れない」ということである。

力を入れずに技をおこなうというのは、常識的に考えればありえないことである。それゆえに、「できるだけ力を使わずに技を掛けなさい」と指導されることもある。とにかく、「力を抜く」ということを稽古中何度もいわれる。

稽古では身体内部の感覚を重視するため、技の手順、身体のかし方ということについては比較的指導されることが少ない。また身体感覚を大切にするため、稽古者は、自分がどのように動いているのかということに注意を払うようにいわれ、さらに自分の身体だけではなく、接触しているところを通して相手の身体も感じるよう指導される。稽古のなかでよくおこなわれるのは、一組のペアになったもの同士が互いに相手の身体の内部分にどのように力が入っているのかを指摘しようということである。稽古は主にそのようにおこなわれ、稽古者は自分自身の身体感覚や相手の身体をも察知する感覚を磨いていく。

稽古では、具体的に次のようなことがおこなわれている。技の稽古は、「受け」（技を掛けられる側）が「取り」（技を掛ける側）の手首を握るところから始める。受けはできるだけ力を抜いて、取った手首を通して、取りの身体の内どこに、どのように力が入っているかを指摘し、一方取りは自身の身体の内どこにどの部分にどのように力が入っているかを把握するように努力する。実際そのような稽古を積み重ねていくと、相手の身体の状態も分かるようになってと同時に、自分の身体の内どこにどの部分にどのように力が入っているかも分かるようになる。その結果、腹部の内どの辺り、腰の内どの辺りなどという具合に、自分自身の身体を微細に感じる事ができるようになる。身体感覚の感度を上げるということは、例えば肩甲骨、鎖骨、肩関節、背骨それらを取り巻く筋肉、それら一つ一つを感じるということであり、そうした身体の一部の動作が、そこから離れた部位にどのように繋がっているか、影響を及ぼしているか、それらを動かすとき、どの筋肉がどのように動いたかを感得するということである。

先に述べたように、M流の稽古は、接触している相手の身体の状態までもを感じるということ

も含んでいる。受けは触れた部分を通して、取りの身体のどの部位にどのように力が入っているかを「感じ」て、それを指摘する。そして指摘することによって、取りの身体の感度も向上していく。このように、稽古者は、互いの身体を感じ合い、指摘しあいながら、身体感覚を磨いていく。そして、身体感覚が研ぎ澄まされていくと、相手に触れずとも、彼の身体のあり方を把握することができる。実際に道場長は、稽古者の練習を傍から見るだけで、術者の体軸がどれくらい傾き、身体のどこにどのように力が入っているか、力の向きがどのようになっているかを、ピンポイントで正確に指摘することができる。更に、相手の立ち方、身体の微細な動きから、相手が何を思っているのかという、彼の気持ちのあり方まで見通してしまう。

筆者もはじめは、触れている部分から相手の身体のあり方を把握するということがわからなかった。しかし、触れているところを通して相手を感じるということは、意識を集中させれば、おこなうことができた。次第に腕や肩といった部分の力みを感じることができるようになり、徐々に手首から遠くにある腰や脚・膝の力みを感じることができるようになった。そして、筆者が受けのとき、取りの身体のあり方を感取することができるようになり、なぜ相手の技が効かないかということを理解できるようになった。取りの技が上手いとき、取りの力の流れが、力んでいるところや緊張しているところで、堰き止められているような印象がある。力の流れがせき止められるところの多くは、肩の関節の辺りや肘の辺りである。しかし、そのような気づきは、筆者自身が取りとなった場合に活かせることは稀であった。他人の様子は見抜けるのだが、いざ自分がおこなおうとすると、上手くできなかった。稽古者は、「技を受けてみて他人の技のよくないところは、いろいろと指摘できるのだけれども、じゃあ、実際にそれを自分ができるかどうかというと、できないですよ」という言い訳めいたことをよく口にする。

稽古における相互のやりとり、そして自他を感

じ取る実践において、徐々に技が生まれてくる。今まで記述してきたような稽古のあり方は、ある意味身体感覚の感度を向上させる訓練となっており、常に自分自身の一つ一つの動きに対して注意を向けさせる。そして身体感覚が鋭くなるほど、自分自身に対する反省のあり方が深くなる。稽古者は稽古を積み重ねるなかで徐々に、自分の身体のなかでどのような反応が起きているのかを感得できるようになる。稽古者は、このような反省的実践のなかで、心身との繋がりを了解するようになり、師範がさまざまな言葉で伝えようとした内容を理解しようとする。

4.2 言葉と技・「敵を無くす」という感覚

S師範は、「私は、植芝先生がいわれた、『この武道は三カ月やったら無敵になるのや』という言葉、『敵を無くする』ということはどういうことか、そしてそれを体で現すということをずっと考えながら稽古してきたのですよ」と繰り返している。そして、道場長もその考えに基づいて稽古しており、「敵を作らない技とはどういうものなのか」ということを考えながら修行しているという。

S師範は有段者研修会において必ずといっていいほど、「無敵ということは、肉体的に誰よりも強くなることではなくて、決して敵を作らないようにすることなのです」と説明している。稽古者の技術が向上していくと、呼吸力でなく、単純に「力」が入った技は、簡単に止められてしまう。技が防がれることについて、S師範は次のように説明している。

「入った力は、『ああしてやろう、こうしてやろう』という気持ちの現れなのです。そして、そうした気持ちを無くしてゆくのが合気道なのです。相手にすべてを『まかせる』気持ちにならなければなりません」。つまりS師範は、心のあり方がそのまま身体的な徴候として現れるということをいっているのである。そして、S師範は、「技を掛けようとする気持ちではなく、本当に相手と一体になる気持ちにならなければなりません」と研修会において常に注意している。

S 師範は、合気道の技は「裸の技」だといい、技が効かないことを、稽古者における技術上の問題という以上に精神のあり方の問題として認識させようとしている。道場長も「相手を投げてやろうとか、相手を痛めつけてやろうとか、相手とぶつかろうとする『邪な気持ち』をなくしていくのが合気道の技なのです」という S 師範の言葉を何度も口にしている。

道場長は、稽古のなかで手首を握らせるために取りが受けに対して手を出すときには「どうぞ、おいでください」という気持ちでないといけないと繰り返し述べ、また、「取りは、受けが『納得して』投げられるように投げる」と説明したり、「受けがしたいことを満足させてあげるようにする」というような比喻を用いて、技の説明をおこなったりしている。

道場長は、「呼吸力というのは、体力を使って相手を体的に抵抗できないようにするものではなくて、相手に抵抗しようという気持ちにさせない技ではないか」と稽古者にいう。抵抗しようという気持ちが起きないのは、そうした気持ちも起きないくらい、技が非常に速いということではない。正確な技の場合、技を非常にゆっくり掛けられても、なぜか抵抗しようという気持ちが起きず、そのまま投げられたり、関節を極められたり、腕を抑えられそのまま動けなくさせられてしまう。

筆者自身が技の感覚を反芻してみても、S 師範の技や道場長の技を受けた場合、瞬間的に自分の体重が感じられなくなるような感覚となり、なんのひっかかりもなく投げられるような感じがする。それに対して、力技でかけられる場合の技では、怖いめか自然に自分の腰が引けていることが多かった。稽古者が理解することは、力ずくの技と呼吸力が効いた技では、受ける感覚が全く違うということである。呼吸力による技は、抵抗しようとする気持ちが起きず、自然に体が動いていくような感覚で、一連の動きの流れのなかで受身を取ることができる。そのため、投げられても「嫌な気持ち」にはならない。むしろ、気持ちがよい。それに対して、力ずくの技では、受けのな

かに抵抗しようとする気持ちが起こり、取りの力に対抗しようとして踏ん張ってしまう。そして力ずくの技の場合、対抗しようとして踏ん張った力を強引に突破するようにさらに力に加えられ、引っっこ抜かれるようにして投げられてしまう。呼吸力で投げられた後のような気持ちよさは感じられない。むしろ、なにかしら「嫌な感じ」が残る。

これを取りの立場から見てみると、技が成功したと感じるときの主観的感覚を記述するとすれば、自分自身の身体に無駄な力みがなく、自分の力と受けの力とがぶつかることなく、自然に相手へと力が流れ、それと同時に相手と自他の区別が感じられない「一体」となった感覚となる。つまり、互いに「呼吸が合い」、受けと「つながった感じ」がする。このとき、受けも取りも「嫌な感じ」はしないし、受けも抵抗しない。

反対に失敗したと感じる主観的印象を記述するとすれば、次の通りである。「技」をおこなう前から「このように動かそう」などの気持ちが、そのまま自身の力みという形で無意識に身体的な徴候として現れ、受けはその徴候に反応し、結果として自身の力と受けの力とがぶつかってしまい、相手とは「一体」とならず、動きがギクシャクしてしまう。このとき、受けは「嫌な感じ」が起こり、無意識に抵抗してしまう。人は誰かに力ずくで無理やり引っ張られると、反射的に抵抗するものである。力ずくで投げる「技」では、相手に抵抗する気持ちを植え付け、「嫌な感じ」を催させてしまう。両者が調和しないぶつかり合いやこの嫌な感じが、双方の心のなかに敵愾心を生んでしまう。

呼吸力がこのような特質を持つものであるため、稽古のときになされる助言は、細かな技術的なことについて当然おこなわれているが、それ以上に「気持ち」や「心持ち」に関することのほうが多くなっている。道場においてよく使用される助言のための比喻は、「受けを敵と思わずに、自分の仲のよい友達とか彼女とかかと思って、それぐらい相手をいたわる気持ちで（技を掛けてみろ）」というものである。これが意味するところは次の通りである。技をおこなう際、受けに対して友達

とか恋人と一緒にいるときのような落ち着いた気持ちとなり、そして受けをあたかもそういう存在として扱うようにすれば、気持ちだけでなく身体的にも理に適った動きになり、そういう心身一致した動きが「敵を作らない技」に繋がっていくということである。簡単にいいかえると、投げようとするのではなく、受けと呼吸を合わせて一緒に踊るぐらいの気持ちでおこなうと上手くできるということである^{注7)}。

4.3 心身の不一致、敵は自分が作るという認識の形成

しかし、上記のことを「頭」で理解できたとしても、それを思い通りに実践できないことのほうが多い。「相手と一体となる」という気持ちで技をおこなっている「つもり」でも、身体がそのように動いていない場合が多いからだ。主観的には「一体となろう」としているつもりでも、身体の方は「投げよう」と力んでしまい、受けに技を止められることが多々ある。そのとき受けは、先に書いたように「嫌な感じ」を抱いてしまう。このように、稽古者は技を掛けるときの心の動きのあり方に気づきを得ても、そうしたことがなかなか身体と結びつかないということを知る。つまり、稽古者は「心」と「身体」とを一致させるということの困難さを理解するようになる。次の稽古者の言葉は、このことを端的に言い表している。

人を壊すのは簡単なだけけれども、人と呼吸を合わせるのは本当に難しいですね。人を壊すのであれば、呼吸を合わせなければいけませんですよ。稽古のときに呼吸を合わせようすると、無意識にああしてやろうとする「我」がでてしまい、本当に相手と呼吸を“ぴたっ”と合わせることができないんですよ^{注8)}。

意識の上では呼吸を合わせようとしているのにもかかわらず、無意識の次元、つまり身体的動作の上では、意識とは違うことをおこなってしまう。そして稽古者は、この無意識的な動きを「我」と捉えるようになるのであり、S 師範が説明するように、技に顕れた感覚を「なにかやってやろう」という無意識の徴候として捉えるようになる。こ

うしたことに限して、稽古のなかでよく見かけられることは、技がスムーズにおこなえなかったときに受けが取りに対して「邪念を持ちすぎ」とか「精神的な修行が足りない」と冗談半分にいうことである。また、道場長が道場生によく語ってくれるエピソードがある。道場長がS 師範に手首を握られて、技を掛けようとするのだがそれが上手くいかなかったとき、S 師範から、「なにかやろうとしているでしょ。あなたは“我欲の塊”ですね」と注意されたという。これについて、道場長は「相手に技を掛けてやろうとか邪な気持ちを持つのではなく、心の深いところから相手と結ぼうとしなさいという戒めの言葉なのだろう」と述べている。こうしたことを稽古者に話しながら道場長は、自分もまだまだ精神的な部分での修行が足りないということを自嘲気味にいう。そのように語りながら、道場長は「心」の領域を鍛錬することの難しさや大切さを稽古者に訴えているように思える。道場長は、『合気道の精神』にある「自己に打ち克ち」というのは、「相手を投げてやろう」とする自分の気持ちを克服することではないかという解釈を、稽古生に話し、また、そうした困難な努力を続けることが、師範のいう「魂の研鑽」ではないかと述べている。

稽古者はこうしたアドバイスを聞き、稽古を続けるなかで、「敵というのは自分が作ってしまうものではないか」という認識にたどり着く。

はじめ自分の技がかからないときは、相手が止めていると思っていただけれども、自分と相手の身体を感じるようになってみると、結局自分は相手に動かなくさせられているのではなく、「自分の力みによって自分が動かなくなっている」ことに気づくようになりました。自分が技を掛けようとする気持ちが、技をできなくさせているのですね。力の流れを意識するようになって、それが分かりました^{注9)}。

こうした発言にみられるように、稽古者は、「敵を無くす」という言葉を教授上の単なる比喩やレトリックとして考えなくなり、また敵を作っているのは自分であるということ、自分の身体経験によって、いいかえれば自分自身の身体感覚

によって、了解するようになる。稽古者は、「一体となる」や「敵を無くす」ということを言葉で説明できても、実際に技に示すことができないければ、理解したとはいえない。稽古者は、『合気道の精神』の文言や「一体となる」「敵を無くす」という言葉の意味を、「心」と「体」で全体的に理解しなければならない。S師範も道場長も「体でわかる」ということを強調する。「一体となる」「敵を無くす」ということをいくら言葉で説明できても、それが意味していることを感覚的に「体でわかっていないと駄目だ」という。稽古者は、稽古の実践のなかで、「一体となる」「敵を無くす」といった言葉の意味を自らの体で「こういうことだったのか」と感得しなければならないのである^{注10)}。

稽古者は、稽古において解発された「感覚」によって、「一体となる」「敵を無くす」という言葉や『合気道の精神』が意味するところを会得する。そして稽古者は、技の感覚とそれらの言葉との繋がりを内省するなかで、感覚が「技」と「精神性」を結び付けているということを発見するのである。そして、稽古者は自身の心身を思うようにコントロールできるわけではないことを認識し、そうした認識のうえでさらに稽古によって無意識の次元を意識的にコントロールしようと努力するのである。

稽古のなかで獲得されたこのような感覚や認識は、道場内の稽古に活用されるだけでなく、それ以外のことにも通用するものとして、稽古者のなかで捉え返される。道場長も、合気道で学んだ認識を道場外の生活などに応用するように促しており、また、稽古者はしばしば合気道の稽古が日常においてどのように役に立っているのかを話し合うことがある。

4.4 合気道の技の応用

稽古で獲得された認識は、道場の外のことへ応用される。このことについて、一つのエピソードを紹介しよう。

稽古者の一人に介護職に就いている青年がいる。ある日、稽古をしているときに、腰の状態が

悪そうにしていたので、筆者が彼にその理由を聞いてみると、介護の際、被介護者を起たせようとしたとき腰を少し痛めたということだった。筆者が、身体の使い方が悪いからではないかとさらに聞くと、彼はそのときの動きを真似してみせてくれた。彼の動きは、背筋力を計測する器具を引っ張り上げるような感じの動きで、背中の筋力に頼ったものであり、見た目にも腰を悪くしそうなものであった。それから、筆者が被介護者役となり、彼は負担のかからない介護の動きを練習していた。われわれの練習を見ていた道場長と整体師を営んでいる先輩が、その場に加わってきて、さまざまな介護技術に応用できる身体技法を実演してみせた。古武術を介護の技法に応用するということは、甲野善紀の影響で広まりつつある。道場長が実演した技法は、そのような技法であった。このとき、道場長は、自分がどう動けば楽に動けるのかということ、具体的には、被介護者の重心と自分の重心を利用した起たせ方や腰や体の上手な使い方を実演しながら、「相手が、自然にそのように動きたくなるような動きじゃないといけないようだよ」といっていた。道場長は、筆者を被介護者役にして、上半身だけ起きた状態から被介護者を起たせる方法を実演してくれた。道場長は筆者の後ろから、中腰の状態で筆者の脇の下から手を入れ、手を交差して握り、そのまま後ろに倒れるように立ちあがった。そのとき筆者は、何の抵抗感もなく、自然に浮き上がるような感じで起たせられた。整体師の先輩にもやってもらったが、同じ感覚だった。代わって、例の青年がやってみると、筆者は脇の下に痛みを感じ、いやいや立たされているような感じがした。筆者も、彼を被介護者に見立てておこなってみたところ、彼は「ちょっと痛いですね」と自身の感覚を述べてくれた。道場長は、「やっぱり、痛かったら起きたくなくなるわけだからね。介護はやったことはないけれども、合気道と根源的のところは同じじゃないかな、つまり、相手の気持ちも体も誘導するということでは、合気道も介護も同じじゃないかな」と彼にいていた^{注11)}。ここにみられるのは、介護で体を傷めないための合理的な技法とし

での合気道の技だけではなく、被介護者の気持ちや体のことを大事に考える「心身の技法」としての合気道の技である。道場長が強調したかったのは、後者のほうである。このように道場長は、機会を捉えては、合気道がどのようなことに応用できるのかということを稽古者に話している。

こうしたエピソードに典型的にみられることだが、稽古者は技の稽古のなかで獲得された認識によって、稽古者自身の日常的な振る舞いや他人とのコミュニケーションのあり方を反省するようになる。稽古者のなかでの「気づき」は、稽古者の日常生活に対して反省を促すようになる。稽古における「取りと受け」との関係性を日常的コミュニケーションと同じようなものとして捉えるようになる。ある稽古者は筆者に、合気道を始めて変わったことを、次のように説明してくれた。

合気道をやる前は、取引会社が約束を守らないとか、取引相手との交渉が上手く行かなかったとき、すぐカッとなって、喧嘩のようになっていたりしたんですが、合気道をやりはじめて、相手を受け入れられるようになって、相手の話を聞くようになりました。心に余裕を持っているので、多少のことは気にならなくなって、仕事がスムーズに進むことが多くなりました^{注12)}。

また同じ稽古者は次のようにもいっている。

昔は若い者を教えるときは、上から頭ごなしに教えていましたが、相手のことを考えるようになり、なぜこのようなことが必要なのかということ説明しながら教えるようになりました^{注13)}。

このように、合気道の稽古のなかで、相手のことを考えるという習慣が身に付いたということを語っている。これらの発言からわかるように、稽古において培われる受け（他人）の状態を看取し、相手と衝突しないようにするということ（敵を作らないということ）が、日常においても活かされている。稽古者は、稽古で身に付けた感覚を基準として、日常的振る舞いや自分自身に対して反省的な眼差しを送るようになる。

稽古を続けていくなかで相手と争おうとする

心を捨て、呼吸力を鍛錬し、徹底して力を抜き相手と結び、一体となるということを具体的に技のなかに活かす稽古の方針、方向性が明確に見えてくるようになりました。そして常に自分自身の内面と素直に向き合う稽古の中で、この道に厳しさ、奥深さを痛感しました。「愛」「和」「結び」をいかに技の中に表現するか、相手と向き合った時、いかに自分が自然な状態でいられるか、そして自然でいるとはなにか。まさに葛藤の連続であります。合気道の稽古はまさに心の鍛錬であると思います。私たちが日ごろ忘れてしまいがちな率直な心、あるがままの心に戻っていることがとても大切なことだと感じています。そして、道場に来て道場の畳の上でするものばかりが稽古ではないということに気づかされます。日常生活においても稽古の大切さを感じます^{注14)}。

このように稽古者の倫理性は、道場における技の稽古のなかでのみ培われるものではなく、稽古のなかで獲得されたものを日常生活に反映させる実践を通して獲得されていくものなのである。つまり、M流合気道の倫理性というのは、道場における技の反復稽古だけで身に付けられるものではなく、道場の稽古を基盤として稽古者が日常の振る舞いを省みることによって獲得されるものである。稽古者は、道場を日常とは切り離された異空間として位置づけるのではなく、道場も日常も同じ平面上にあるものと位置づけるようになるにつれ、技のあり方と普段の生活のあり方が相互反照的なものとなる。そうであるがゆえに、稽古者は常に反省的にならざるを得ないのである。そして、常に反省的であるがゆえに、合気道の倫理が理念として理解されるのではなく、行動の規範として身体に根付いていくのである。

5. 考 察

ここで意味生成という観点から、これまでの記述を捉え返してみよう。先に述べたように意味生成とは、世界と自己との関係の根本的な変容のことであった。

多くの稽古者は、合気道や武道に対する興味や護身のために入門し、「呼吸力」という不思議な力を経験し、それを身に付けようと努力する。第4章1節から2節で述べたように、稽古のなかで稽古者は感覚を研ぎ澄まし、自分の身体だけではなく他人の身体をも感じるようにいわれ、そして「相手と一体になれ」と指導される。そして、「呼吸力」で相手を投げることができたとき、稽古者は個別的な主体ではなく、我であって我でないような「間身体的」な主体として動いているように感じる。この「間身体的」な主体を、作田のいう「超個体我」と捉えてもよいだろう。作田によれば、超個体我とは、「個体を超えて対象と融合する自我を指しており、その特徴を対象中心性のなかに見ることができる」（作田，1993，p. 91）。対象中心性とは、「主体が利害関心を離れて客体に没入する，あるいは客体と融合する知覚や態度」のことであり，そうした知覚や態度において，客体の全貌は，生きたもの，分割できないものとして経験される。そのとき，主体は，全体として客体に関わり合っていると感じる。しかし，この全体的な参加あるいは没入は自己意識の喪失を意味せず，反対に自己意識はますます鮮明になる（作田，1993，p. 112）。このようにみるとM流の稽古は，対象中心的な態度で，つまり利害を超えた全体的存在として稽古相手とかかわるようになるための訓練となっているといえるだろう。

第4章3節と4節において，次のことを記述した。すなわち，稽古者は，心や身体をコントロールすることや，心身を本当に一致させることが困難であること，そして，自らの心身に対して繊細な注意を払い，内面を見つめなおすことで，稽古が他者とのコミュニケーションのあり方や他者との共生のあり方に繋がっているということに気づく。

このような気づきや先の無境界の経験（溶解体験）によって，自己が変容する，すなわち新たな意味が生成するのである。

（合気道を学ぶまでは）「生徒に悪いことは悪いとしっかり教える」「解らない時は，力づくでも分からせる」という教育観を持って生徒に

接していた。しかし，その方法では，厳しい私の前でしか生徒はきちんとできず，一生懸命私が叱ったことや注意したことは生徒の心には届いていなかった。結局私の教育観や，私の接し方では生徒の心を動かすことはできていなかったのだ。……（M流の諸先生の言葉が理解できた時）私の中の人生観の根本的な発想が変わっていった。その結果，稽古の中でも単に力を抜くだけではなく「相手との結び」を意識できるようになった。また，生徒との関わり方も随分変わり，生徒の心を動かすことができるようになった。私が考える呼吸力で大切なことは，気持ちも体も力を入れないことだと思う。力で動かそうとすると，相手は必ず同じだけの力で押し返してくる。そうするとお互いに動かない。しかし，力が抜けた腕は抵抗がなく，相手は反抗することはできない。その状態をつくって相手を導いてやれば相手は自分から動いていく。練習中に肘や肩の力が完全に抜けた状態で相手に腕をとらせると，必ず相手の動きが見えてくる。……相手が無意識につくった方向に呼吸を合わせ抜けた状態で相手の行きたい方向に導いたとき，相手は抵抗なく動く。……呼吸力の精神が合気道だけでなく，すべてに通じているのである。もちろん教育にも通じている。無理矢理に生徒の心を動かそうとしても思春期の生徒は絶対に動いてくれない。物理的に動いたとしても，心は絶対に動かない。しかし，自分の中にある力みを捨て，M流合気道の精神で生徒に接すれば，どんな生徒の気持ちであれ理解でき，生徒自身が優しい気持ちを持って，正しい方向へと自ら進んでくれる^{注15)}。（括弧内筆者）

これまで引用してきた稽古者の言葉から理解できるように，彼らは，合気道の稽古のなかでこれまでとは異なる世界観があること，そしてそうした世界観を心身全体で理解しようとし，さらに道場内と道場外との境界をなくし合気道の稽古と日常生活を反照的に省みる過程において，新たな価値観を構築し，倫理を身に付けていくのである。このようにして身に付けられた倫理は，抽象的なお

題目としてのそれではなく、稽古において試行錯誤した結果獲得された、具体的で〈生きられる〉ものである。

さて、ここまで倫理という言葉で大雑把に「生き方」という視点で捉えてきた。だが、前林(1989)や入江(2005)が指摘するように、倫理には、社会的な規範に自らを適合させる「社会的倫理観」と自己の内面を探究し絶対的境地を目指す「内的倫理観」がある。前林によれば、武道の目的は本来「内的倫理」の確立にあり、「社会的倫理」というのは後から付け加えられた副次的な目的にすぎない。「社会的倫理」というのは、「武士道」の思想であり、「武道」の思想ではない。ゆえに、現代において武道に求められている「社会的倫理」と「内的倫理」は本来的には関連性はない(前林, 1989, p. 16)^{注16)}。この「社会的倫理」と「内的倫理」という観点から、M流で獲得される倫理をみてみよう。

まずいえることは、稽古者は呼吸力の習得によって『合気道の精神』に表れている境地(「絶対的自己完成」)を目指しているという点では、内的倫理の獲得を目指している。だが、これまで記述してきたように、稽古者はそうした境地を目指す過程において自身の心身のあり方を省みることで、他者との共存のし方を考えるようになっていた。稽古者は、合唱する開祖の道歌にある「世と安く和す」ことを実践しようとするのである。そうした点では、「内面的倫理」を目指す過程で「社会的倫理」も併せて身に付けているといえるだろう。内面的倫理と社会的倫理が両立するのは、植芝の思想やそれを引き継いだS師範の指導に依るところが大きいだろう。稽古者は、植芝のような神秘的な体験をするわけではないが、植芝の言葉に表現されている崇高な境地を目指して技を習得しようとし、そして植芝が伝えようとしたことを体で理解しようとするなかで、他者との共生のし方を、つまり社会のなかでどのように生きていくのかということを学び、日常生活において「敵を無くす」という倫理を実践していくようになるのである。このようにM流においては、植芝の言葉を稽古者自身の身体によって理解しよ

うとすることによって、内的倫理と社会的倫理が矛盾することない一貫したものとして実践されるのである^{注17)}。

6. おわりに

以上、フィールド・ワークの経験から、稽古者たちが倫理性を獲得する過程を稽古者の身体経験に内在させて記述してきた。

そこで観察されたことは、まず、稽古はじめに合唱される『合気道の精神』が技の習得のためのヒントであること、技の習得を方向付けるものとなっているということである。稽古において使われる、「一体となる」「敵を無くす」「敵を作らない」などの言葉や比喩は、合気道の世界観や精神性に位置づけられている。そうした言葉は、稽古者に技の感覚を捉まえさせるための単なる比喩などではなく、技の感覚そのものを表現していたのであり、それらは合気道の世界観に根拠づけられている。言葉を換えていえば、合気道の技の感覚と合気道の精神性は、身体(感覚)という媒体を通して、密接に関連付けられているのである。M流の稽古において稽古者は、技を互いに繰り返しておこなうなかで、言葉が意味するものと身体感覚が、感得的に結びついていく。M流において、「一体となる」「敵を無くす」という言葉は、他者と繋がるという独特な技の感覚そのものを指しており、その感覚それ自体が精神性を指し示しているのである。

稽古では身体感覚が大切にされ、それをより繊細にしていくことが重要とされる。そして、稽古のなかで獲得された技の感覚やあり方が、日常的な経験、具体的には他者とのコミュニケーションのあり方に対して反省的に働きはじめる。日々の稽古のなかで繰り返される「我」を出さないという自己抑制の機制が、道場の外においても作動するようになる。このように稽古者は、道場における修行と日常生活とを分けることをしなくなり、常に自己のあり方をチェックするようになる^{注18)}。稽古者は、道場での稽古と日常生活とを相互反照的に反省し、自己の心身に対する反省を

おこなうなかで、個別に生きられる倫理を構築しているのである。

武道の役割の一つとして、確固とした価値観を形成させるということがある。しかし、武道の倫理性という議論となると、身体的な実践とは切り離された理念的で抽象的な議論となってしまう。先に述べたように、これまでの研究においては、稽古者がどのような過程で倫理性を獲得するのか、そしてそこに身体的な実践が関わっているのかということについては議論されてこなかった。本稿では、ある合気道流派の稽古者の経験に着目し、稽古者の言葉に基づいて、意味生成＝倫理性の獲得の過程を記述してきた。そこで観察されたのは、稽古のなかで獲得された感覚に従って、日々経験されることを反省するというものであり、そのような身体性に基づいた反省が倫理性を生み出しているということである。

本稿では、稽古者自身の心身に対する反省過程に着目することで、いかに倫理性が生成してくるのかということ記述してきた。本稿は、稽古者の内面に焦点を当てることでこれまであまり検討されてこなかった、稽古者がいかに倫理を身に付けていくのかということ詳細に記述してきた。技の稽古を積み、切磋琢磨し、試合に勝つために努力すれば、自動的に武道の理念や精神性・道徳性が身に付くというわけではないし、人格形成ができるというわけでもない。本稿が示してきたように、道徳性が身体化されるには、自分自身という存在に対して心身両面での反省が不可欠なのである。こうしたミクロなプロセスを明らかにすることで、武道の現代における役割を根本から考えることができるだろう。また、こうした研究は、抽象的で思考実験に頼りがちな「心身論」を経験的に論じることを可能にするものでもある。

いうまでもなく本稿の議論は、数ある武道のなかの一つの例を取り上げたものにすぎない。それゆえ、他の武道、特に競技のある武道では本稿とは違ったプロセスがみられると考えられる^{注19)}。こうした武道間の比較研究も重要な課題であろう。本稿が、武道と倫理との関係をこれまでとは違った角度から議論できるようになる端緒となれ

ばと思う。

注

- 注 1) 誤解のないようにしておくが、筆者はスポーツには人格を形成する力はないといたいわけではないし、スポーツのそうした力を否定しているわけではない。誰もスポーツが持つ教育的意義を否定することはできないだろう。スポーツと武道との教育のあり方（指導法）の違いについては、友添・和田（1993）を参照。
- 注 2) 「意味生成」という概念は、身体教育において久保（2009a, 2009b）や深沢・石垣（2010）によって建設的に検討され、この言葉の理論的可能性は広げられている。本稿は久保や深沢・石垣とは異なり、「意味生成」という概念の理論的可能性を彫琢させるものではなく、この概念の経験への適応可能性を図る。
- 注 3) 以下のデータは、このフィールド・ノートによる。この調査は、もともとスポーツ社会学的な観点からおこなったものである。筆者は、スポーツ社会学的身体論の立場から合気道に関心を持ち、それをフィールド・ワークの対象として選んだ。合気道を選んだ理由は、その技が「神秘的」といわれるためであり、そのような神秘的な技がどのように伝達されるのかということに関心を持ったためである。
- 注 4) 前林の次の指摘は、歴史的文献を解釈する際の研究者のスタンスを述べたものだが、本研究においても重要な指摘であるように思える。「武道における修行をテーマとして研究しようとするれば、記述の端々にみられる武芸者の感覚的記述をよりどころに、彼らが体験した技法や心法がどのようなものであったか、またそれが彼らにとってどのような意味をもっていたのかということ、研究者が自分の体験などをもとにその内容を確認しながら、解釈しなければならないであろう。このような態度が、その理論的考察の基盤として必要と考える」（前林，1988，p. 40）。
- 注 5) S 師範は、2010年に亡くなっている。以下の記述は、師範が存命時のものである。
- 注 6) なお、師範が亡くなった後も有段者研修会は続けられている。
- 注 7) 合気道の身体技法を身に付けようとしておこなう、力を抜くとか身体感覚に意識を向けるという努力のなかで、稽古者の認識のあり方が徐々に変容しはじめる。それに伴い、彼・彼女らの身体に対する価値評価のあり方も変わる。稽古者は、例

えばヘラクレスのような筋骨隆々の身体ではなく、細身でも全身をバランスよく使っているアスリートの身体を理想的な身体と思うようになる。例えていうなら、どのような攻撃にもびくともしない筋肉の鎧で固めたような「硬直した身体」ではなく、固着せず常に流動している「柔軟な身体」を武道的身体の理想とするようになる。それゆえ稽古者は、直線的な力強さではなく、滑らかさや柔軟性のなかに、そうした性質が体现されている身体に、ある種の美学を感じるようになる。稽古者は、鍛え抜かれた強靱な身体ではなく、身体に内在する「技」のほうを重視するようになり、客観的に一目瞭然の身体的な強さよりも、実際の動きのなかで感じられるような「技」に関心を向けるようになる。

注 8) フィールド・ノート, 2007年 5 月27日。

注 9) フィールド・ノート, 2009年 5 月14日。

注10) メルロ＝ポンティがいうように、身体とは「私の〈了解〉の一般的な手段」(メルロ＝ポンティ, 1974, p. 48)なのである。そのようにいう彼は、このような言葉と身体の感性的な関係を次のように説明する。「言葉は身振りをとりあげ直し、身振りは言葉をとりあげ直すのであり、それらは私の身体を通してたがいに交流するのだ。それらは私の身体の感官的諸相と同様にすぐさま相互に象徴し合う。というのも、私の身体とはまさしく相互感覚的な等価関係と転換との完全にできあがった一体系だからである」(メルロ＝ポンティ, 1974, p. 47)

注11) フィールド・ノート, 2008年 7 月22日。

注12) フィールド・ノート, 2009年10月26日。

注13) フィールド・ノート, 2009年 9 月30日。

注14) 会報誌, 2007年 5 月号より。会報誌は月一回発行されている。内容は、S 師範が語ったことや、稽古者の作文などが掲載されている。

注15) 会報誌, 2003年 5 月号より。

注16) 武道・武術が持つ暴力性と社会秩序の維持について、森山 (2010) は格闘漫画を題材に論じている。森山は、漫画の内容分析を通して、武道・武術の暴力性がいかにその危険性を除かれつつ社会のなかに包摂され、同時に社会にとって危険な暴力がいかに排除されていくのかということを論じている。そして、バタイユのエロティシズム論を参考にしながら、暴力論の可能性について論じている。

注17) 湯浅は、合気道の思想的意義を次のように説明している。「合気道では、試合をして相手に勝

つとか、勝負を争うということは目的になりません。『合気』とは相手と気を合わせるという意味です。それは、相手の心身の動きと自分の心身の動きを合わせることですが、より一般的にいえば、相手と調和し、一体になり、他者を包容した自他一体の状態に至ることが目標であるわけです。このように、他人と対立し他人に勝つことを目標として生まれた武術が、自分自身に勝つ技術に変わり、さらに他人と和し、他人と一体になる技術にまで変わっていったところに、日本の武道というものの重要な思想史的意義があると思います」(湯浅, 1986, p. 60)。本稿は、こうした思想的意義の実践的な側面を稽古者の視点から記述したのである。

注18) こうした意味において、植芝盛平が述べたように「合気即生活」となるのであり、その弟子塩田剛三が述べたように「行住坐臥、これ最上の道場なり」ということになる。

注19) 例として、フルコンタクト空手を取り上げてみよう。ここで取り上げるのは、経済学者の松原隆一郎の意見である。彼は、フルコンタクト空手と柔道を修行し、毎日のように稽古を重ねている。空手のほうは、師範クラスの腕前である。松原は、実際に戦えることを非常に重視している。彼は、「たんに形を稽古するだけで乱取りや公開の試合を行わない流派は、格闘技には含めない」といい、そういうのは、「何が起きるか分からない乱取り状況で生かされてこそ、極意や精神性は生命を吹き込まれるから」(松原, 2002, p. 24)という。また、松原のいう武道の「精神性」とは、「自己修練」ということである。これは、闘いを通じて自己を修め社会に寄与貢献するというものである。そして松原によれば、その度合いを示すために、日本の武道では、段位制が設けられている。つまり、より高い段位を目指すことで、自己の修練をおこなえるようになっていく。松原は、暴力を昇華させ、いままでの自分に打ち克つという向上心を精神性と捉えている。ある意味、技術的な向上がそのまま自己鍛練、すなわち精神性の向上に直結していると考えられている。こうした主張には、筆者が記述してきたものと異なる武道の精神性が記されている。こうした違いには、各武道の試合に対する考えや、心身観が根本にあるのだと思われる。

文 献

- ボディフォード：山田奨治訳（2005）禅と日本の剣術の再考．山田・ベネット編 日本の教育に“武道”を一21世紀に心技体を鍛える．明治図書：東京，pp. 145-178.
- Downey, G. (2005) Learning capoeira: Lesson in cunning from an Afro-Brazilian art, Oxford University Press: New York.
- 深澤浩洋・石垣健二（2010）スポーツにおける意味生成論—拡大体験の可能性とその契機—．体育学研究，55: 97-110.
- 入江康平（2005）理念としての武道—武道の特性から考える—．山田・ベネット編 日本の教育に“武道”を一21世紀に心技体を鍛える．明治図書：東京，pp. 231-246.
- 亀山佳明（2012）生成する身体社会学—スポーツ・パフォーマンス/フロー体験/リズム．世界思想社：京都．
- 久保正秋（2009a）意味生成としての「スポーツ運動」体験の意義．体育学研究，54: 183-196.
- 久保正秋（2009b）「体育における人間形成」論の批判的検討—身体の意味ある「体験」—．体育哲学研究，39: 1-9.
- 前林清和（1988）武道における「修行」についての一試論．倫理学，6: 39-50.
- 前林清和（1989）教育としての「武道」の問題—特に学校教育との関連より—．筑波大学体育科学紀要，12: 11-17.
- 前林清和（2007）武道における身体と心．ベースボール・マガジン社：東京．
- マーク（2005）武道と教育．山田・ベネット編 日本の教育に“武道”を一21世紀に心技体を鍛える．明治図書：東京，pp. 62-72.
- 松原隆一郎（2002）思考する格闘技．廣済堂出版：東京．
- メルロ＝ポンティ：竹内芳郎他訳（1974）知覚の現象学(2)．みすず書房：東京．
- 森山達矢（2010）マンガにおける格闘技と暴力の表象．岡井編 レッスル・カルチャー—格闘技からのメディア社会論．風塵社：東京，pp. 57-90.
- 本村清人（2005）日本の学校教育における武道．山田・ベネット編 日本の教育に“武道”を一21世紀に心技体を鍛える．明治図書：東京，pp. 52-61.
- 大矢 稔（2005）剣道教育の中心的課題—技法と心法の相即に着目して—．山田・ベネット編 日本の教育に“武道”を一21世紀に心技体を鍛える．明治図書：東京，pp. 23-39.
- 作田啓一（1993）生成の社会学をめざして—価値観と性格．有斐閣：東京．
- 寒川恒夫（2005）武道で何を教えるか．山田・ベネット編 日本の教育に“武道”を一21世紀に心技体を鍛える．明治図書：東京，pp. 15-22.
- 竹田隆一（1996）武道における精神性の捉え方についての研究—運動実践との関わりを中心に—．山形大学紀要（教育科学），11(3): 139-154.
- 田中 守（2000）武道の心—日本の身体運動学習論—．身体運動文化学会編 身体教育のアスペクト．道と書院：東京，pp. 60-80.
- 友添秀則・和田哲也（1993）Implication of the learning theory of Edo martial arts to a new paradigm of sports．スポーツ教育学研究，13: 45-54.
- 植芝吉祥丸（2000）図解コーチ 合気道．成美堂出版：東京．
- 魚住孝至（2005）宮本武蔵『五輪書』の思想史的研究．山田・ベネット編 日本の教育に“武道”を一21世紀に心技体を鍛える．明治図書：東京，pp. 122-144.
- 矢野智司（1995）子どもという思想．玉川大学出版部：東京．
- 矢野智司（2000）自己変容という物語—生成・贈与・教育．金子書房：東京．
- 湯浅泰雄（1986）気・修行・身体．平河出版社：東京．

（平成24年9月7日受付）
（平成25年3月18日受理）